

“つなぐ”人々

特集の後半は、人と人がつながる場をつくりだすことで、ロボット界に新しい流れをつくりだそうとしているお三方へのインタビューである。今の、そして将来のロボット界が透けて見えるようなお話を聞くことができた。

あずさ
梓 みきお



ユーザー同士をつなぐ

(株)エルエルパレス

ホビーロボット事業部「ロボットフォース」
事業部責任者

いわき ゆうじ
岩気 裕司 さん

岩気さんは、二足歩行ロボットイベント「ロボゴング/ロボファイト」の主催者であると同時に、自ら「ROBO-ONE」に出場するロボットファンでも

ある。まったくロボットと関係ない分野から参入してきたように見える同氏が、なぜロボットイベントを立ち上げるに至ったのか。また、参加者としての視点も持つことで、「ロボコン」ではないロボットイベントをどう捉えているのか。そのあたりから、「ロボットフォース」の今後の展開までを伺った。

「最初はAIBOくらいしか知りませんでした」

以前、「ロボゴング/ロボファイト」を取材(本誌No.40掲載)させていただいたんですが、そのときに、主催の「ロボットフォース」の母体である(株)エルエルパレスが、同人誌販売の会社だということを知りました。ロボットとはまったく関係のない世界から参入してこられたように見えたので、どうしてなんだろう、ということはずっと伺いたかったんです。もともとロボットを趣味で作られていたりしたのでしょうか?

岩気裕司さん(以下、岩気): いえいえ。ロボットは「AIBO」くらいしか知らなかったんですけどね。インテックス大阪^{*1}のイベントなんかは「今、何が流行ってるンヤろ」とよく見に行ってたんです。2004年の5月に、大阪で「ロボカップジャパンオープン」が開催されたんですが、そのときに「AIBOでサッカーやるらしいから、見に行ってみよか」と、軽い気持ちで出かけたんですわ。

会場に行ってみたら、ロボカップの併設ブース^{*2}で流れていたROBO-ONEの映像を見てしまいまして(笑) 小さい二足歩行ロボットがあって、バトルするレベルで動いて、しかも大会まであるということ、そこで知りました。

きっかけになったAIBOのほうはどうでした?

岩気: そのときはたまたまなのか、あんまり動いてなかったんですよ。それよりは、中型機リーグのほうか動いててよっぽど面白かった。試合はやってなかったんですが、「VisiON」の練習と、「HAJIME

ROBOT」と「マジンガア」が動いているのも実際に見ました。

もともと30~40代の男性というのは「DNAの奥深くに刻みこまれた“ロボット遺伝子”」がありますから、6月には「BTH021B」^{*3}を購入して、そのあとに「KHR-1」へ乗り換えました。ぶっちゃけ、「シンボータまらんっ」状態ですわ(笑)

「無関係なところから参入したわけではないんですよ」

(笑) そこまでは、たぶん多くのロボットファンと同じ道筋を辿られたのだと思うのですが、そこで、個人の趣味にとどまらず「事業」にしようとしたのは、なぜだったのでしょうか?

岩気: 興味を持って調べていくと、こういった二足歩行型のホビーロボットは、ちょうど私のような30~40代の間で、潜在的な要求があるのがわかってきました。この集団の中で、早い段階で小規模でも爆発的なムーブメントを起こすことができれば、大きな市場を掘り起こすことができるだろうと予測できたんです。

しかし、私らは技術系の企業ではありませんから、ロボットそのものの開発なんかは難しい。そこで、イベントや関連商品、サービスを扱う方向でならできるのでは、と思い立ったわけです。

それで、ロボゴング(2005年4月)/ロボファイト(同年5月)というイベント企画が生まれたんですか?

岩気: いえ、最初から考えていたのは、エンターテインメント的な映像コンテンツとしてDVDを出すことです。実際に2004年の12月

*1 大阪市にある国際展示会場。2004年の「ロボカップジャパンオープン2004」や、2005年の「ロボカップ2005大阪世界大会」も、ここで開催された。

*2 「ロボカップジャパンオープン2004」と併催された、「ROBOTREX2004」のこと。

*3 (株)ベストテクノロジーの二足歩行ロボットキット「FD Jr.KIT」のこと。現在は生産が終了している。